

アメリカミシガン州駐在員便り

2012/6/30 駐在員 瀧 健太郎

【ミシガン・滋賀姉妹県州委員会との協働 ～ “ここにいてくれるから”】

8月23日～30日までの8日間、[ミシガン・滋賀友好親善使節団](#)として県民のみなさん39名がミシガン州を訪れ、州内の各姉妹都市でのホームステイを通じて、滋賀県とミシガン州との友好親善が図られました。

友好親善使節団は、年に1度、滋賀県とミシガン州とで交互に編成され、滋賀県からミシガン州には計19回、ミシガンから滋賀には計16回訪問しています。来年はミシガン州からの使節団を滋賀県で迎えることとなります。

滋賀県と米国ミシガン州とは「湖」の取り持つ縁で1968年に[姉妹県州](#)となりました。ミシガン州において、滋賀県とミシガン州とのさまざまな交流を進める母体となっているのが、[ミシガン・滋賀姉妹県州委員会](#)です。例えば、今回のホームステイ先の調整や歓迎式典や送別会の段取りもすべて姉妹県州委員会が担っています。

このミシガン・滋賀姉妹県州委員会は、ボランティアで運営されており、各姉妹都市の代表者と9名の幹事で構成されます。滋賀県庁からミシガン州に派遣されている駐在員は、一委員としてこの委員会に参加しています。住民参加ではなく、いわゆる行政参加をしています。そして、滋賀県が当該委員会に助成等の資金援助をしているわけでもありません。

在デトロイト日本国総領事館の方々は、「これほど活発に機能している姉妹県州関係は他にない」と様々な機会でも、滋賀県とミシガン州との関係を紹介して下さいます。

長年、このプログラムに尽力されている姉妹県州委員会のリリアン・クマタ委員に、これまでの成功の理由をお聞きしました。

「それはあなた方が“ここにいてくれるから”です。活動には資金援助も必要だけれど、資金は他で何とかします。何よりも滋賀県の職員が“ここにいてくれること”が一番重要なことです。だから私たちは続けてこられたのですよ。」

ここに協働の本当の意味があるように感じ、目の覚める思いでした。これまでの県庁生活を振り返ると、行政が作った組織であっても予算の切れ目が縁の切れ目になりがちだったように思われます。けれど、ほんまもんの協働は、実は予算の切れ目から始まるのかも知れません。

この姉妹県州委員会を中心とした長年の交流を通じて、ミシガン州には滋賀県を訪れ、滋賀県を

第2のふるさと、あるいは、大切な友人だと思って下さる人たちがたくさんいます。

例えば、滋賀県の経済団体が視察に来ると話すと、快く受け入れを申し出て下さる企業いくつもありました。そのような企業の中では、必ず滋賀県に“縁”を持つ人が声を上げて下さっています。

「実は大津港からミシガン船に乗っていたのですよ」

「高校生交流で滋賀県に行きました。今でも滋賀県の友人と連絡をとっています。」

「親善使節団に参加して2回、滋賀県に行きました。けれど夏はとても暑かった。」

「滋賀県の方のホストファミリーをしました。僕は日本文化に興味があるんです」

「JCMUのプログラムで彦根に留学をしました。みなさんとても優しくかったです。」

ミシガン州内のどこに行ってもこのような声をお聞きします。

44年にわたって連綿と紡がれた両県州の絆は、今、教育・文化、経済などさまざまな面で滋賀県に大きな利益もたらしてくれています。